

ミャンマー人身取引被害者自立支援のための能力向上プロジェクト

No.38/ 2016年3月30日

ミャンマーでは、強制結婚、強制労働、性的搾取などの人身取引被害者が多く発生しています。経済活動のグローバル化が進み、人の移動が増加し、それに伴い今後ますます人身取引被害も増加することも危惧されます。JICAではミャンマーで2012年より被害者支援を行う関係者の能力強化を目的として、本プロジェクトを実施しています。

ヤンゴンからミンガラーパー(こんにちは)

自助グループワークショップを開催(3月10,11日)



タイでの自助グループ活動を紹介する LOL メンバー

プロジェクトではパイロット活動として、「人身取引被害者のための情報センター」の設立やマンダレーでの「サバイバーズギャザリング(被害者の会)」の実施を支援してきました。その中で、支援者と被害者、また被害者同士のネットワークも形成され、被害者の方たちが継続的に話し合い、助け合っているような、また被害者の声を社会に発信できるような自助グループ活動につなげていけないかの検討もしてきました。

しかしミャンマーの被害者の方々の生活環境は厳しく、日々の生活に追われて活動する余裕がないというのが現状です。そのような中、タイでの自助グループ活動について学び、どうすることがミャンマーでは可能か、そのためにはどういう支援が必要かを話し合うためのワークショップを、首都ネピドーで2日間にかけて開催しました。

実施に際してはタイの JICA 人身取引対策プロジェクトと連携し、タイの自助グループ「Live Our Lives (LOL)」を招聘しました。参加者は、タイから LOL メンバー3名とタイの人身取引プロジェクトスタッフ1名、ヤンゴンから情報センターのスタッフ1名とボランティアスタッフ1名、情報センターが支援した被害者2名、マンダレーからはパイロット活動を実施したミャンマー女性連盟のメンバー2名と被害者2名、それにネピドーの社会福祉局本局から5名と警察の人身取引対策課から2名の計19名です。

支援を受ける側から支援する側へ

1日目はオリエンテーションのあと、まず参加者全員の自己紹介から始まり、LOL 代表から会の紹介と活動内容についての発表がありました。2006年に13人の被害者でスタートした自助グループは、今では全国に100人以上のメンバーを擁し、2012年にはタイの人身取引法に基づき活動を行う NGO として政府に正式に認可されています。メンバー間で悩みを共有し互いに助け合うだけでなく、帰還した被害者に必要な情報を提供し、社会資源や公的サービスにつなぐ役割もしています。また活動の中から見えてきた課題を被害者の視点で政府や社会に発信し、学校での劇を使った啓発活動などにも活かすなど、幅広い活動内容について説明がありました。

参加者はタイでの活動について学ぶとともに、タイでも活動を継続するのは資金面などで難しいこと、被害者が自分の権利について十分に知らされていない場合が多いこと、また支援制度はあってもうまく運用されていない現実や、裁判の支援をしている中での様々な困難など、LOL のメンバーが日々直面している課題についても具体的な話を聴くことができました。

活動を続けていく中で、「支援を受ける側から支援する側に」という話は、ミャンマーの被害者の人たちに大きな刺激になったようで、午後のワークの話し合いに取り上げられていました。社会福祉局など支援する側からも、「設立の経緯を知りたい」、「外国人被害者も支援するのか」など数多くの質問が出ていました。

ミャンマーで何ができるかを話し合う



グループワークで座り込んで話し合うヤンゴングループ



テーブルを囲んで話し合うマンダレーグループ

午後はヤンゴン、マンダレーから参加した被害者と支援者4名の各グループに、LOLメンバーや社会福祉局のスタッフなど他の参加者が加わり、通訳を介しながら「ミャンマーではどのような自助グループ活動が可能か、必要か」「何が課題か」「どのような支援があればよいか」について、たっぷり2時間話し合いを行いました。

グループワークの成果発表

休憩をはさんで、いよいよグループで話し合った内容の発表の時間です。発表者は各グループで自由に決めてもらいましたが、どちらも被害者の方が発表者となりました。2グループとも、項目毎に討議内容をまとめたものをもとに、非常にわかりやすく的確な報告を行いました。以下に報告内容の一部をご紹介します。

ヤンゴングループは、必要な自助グループ活動として、性別や宗教、移住の形態（合法、非合法）に関わらず誰でも参加できるグループを作り、互いに話し合い支え合う、新たに帰還した被害者を支援し再び社会の中で生きていけることを示す、家族や地域の人たちとの問題について話を聴き支援する、就業機会を開拓し仕事を紹介するなどを挙げました。課題は、交通費や食費などの予算、毎日生きるために働かざるをえず活動に時間が取れない、家族が理解を示さない、地域からの支援がない、被害者は辛い経験を話したがいらない、活動に興味を示さないなどです。必要な支援は、資金の提供、政府からの支援、メンバーへのカウンセリングや組織運営などに関する研修の提供です。

マンダレーグループからは、自分の意志で参加する少数の被害者の会からスタートする、それぞれのメンバーの役割を明確にする、地域レベルで政府との協力

体制を作る、随時活動の評価をしていくなどが挙げられました。被害者側の課題は、生きる目標を失い判断ができない、自分の能力を活かせない、今直面している問題だけに焦点を当ててしまう、家族に心配をかけたり家族から誤解される不安、地域で差別的な目で見られる不安、どうやってグループを立ち上げるかわからないなどです。一方支援者側の課題としては、支援能力の不足、被害者がしてほしい支援と実際に提供される支援のギャップ、支援に関わるさまざまな制限、被害者への関心やコミュニケーションの不足、人身取引が国の優先課題にならないなどが挙げられました。必要な支援としては、タイでLOLが受けた支援のように、会の運営についての継続的な支援、政府からの帰還者への社会復帰支援などが挙げられました。

成果共有セッションと警察への表敬訪問

2日目の成果共有セッションには、ミャンマー女性連盟の会長と事務局長にも参加していただきました。まずはLOLからワークショップの内容を踏まえて、被害者の求める支援が必ずしも市場のニーズとは合っていない場合もあること、被害の回復には時間がかかり、支援するタイミングも被害者によって異なることなどの実質的な助言がありました。その後両グループからの成果発表があり、今後の活動に向けて参加者全員で活発な意見交換が行われました。

午後は人身取引対策課を表敬訪問し、ワークショップの報告を行うとともに、警察に期待する被害者への支援についてもタイ側、ミャンマー側双方から話をさせていただきました。

ミャンマーで自助グループ活動を始めるには多くの課題がありますが、プロジェクトでは引き続き被害者への支援や、政府や女性連盟など支援者への働きかけを行っていきます。



警察でワークショップの成果について報告する LOL メンバー